

今村真さん

1924(大正13)年3月13日生まれ
当時の本籍地 長野県川路村(かわじむら)



満蒙開拓青少年義勇軍
陸軍 憲兵
関東軍憲兵司令部科学偵謀班
満州、ウズベキスタン

●1939(昭和14)年4月 満蒙開拓青少年義勇軍に入る

- ・長野県伊那郡川路(かわじ)村出身。長野は養蚕業が成り立たなくなり、戦前の不況はすごかった。
- ・教師が満州はいいぞと言う。教師だけでなく新聞社や県の外郭団体、皆が言った。県から学校に割り当てが来ていた。学歴より、満州へ行っていっちょまえになろうという志さえあって体が丈夫、親が承諾すればいい。
- ・4人一緒に行って、1人が亡くなった。
- ・内原訓練所に入所。建築を勉強したいと言ったら鯉淵学園(満蒙開拓幹部訓練所)に移された。
- ・渡満し、ハルビンの大きな訓練所に1年ぐらい。気候に慣れ、中国語を習う。小訓練所に移り2年、農業、畜産など実務を覚える。私はレンガ建てのロシア建築を習いに行った。

●1942(昭和17)年秋 開拓地に入る

- ・義勇軍ではなく、川路村が分村していたのでそこに入った(ジャムスとハルビンの間)。300軒になると学校や病院が作られる。川路村は規模が小さく呼びこまれた。
- ・団長は60歳過ぎで、中堅世代は出征しているので行ったらその日から幹部

●1944(昭和19)年3月1日 志願して満州・孫呉の第1師団野砲兵第1連隊に入隊

- ・みんなが同じ時期に兵隊に行っても困るし早く行って早く帰ろうと思って志願したが、
- ・部隊は18年ごろから南方に連れて行かれ教育係しか残っていない。夏服を貰ったら終わりだとみんな言っていた

●1944(昭和19)年5月 新京の憲兵教育所に入隊(関東軍憲兵教育隊第13期生)

- ・6年開拓で満州にいるのに 満州は守るけど何も南方に行くことはない、南方は内地の人間が守ればいいと思っていた。逃げるところはないかと思っていると、ちょうど憲兵の募集があり、300人応募、20人ぐらい合格した。
- ・満州にいたので中国人の言葉も分かるのも良かったかもしれない。勉強しなかつたので、身体に吸い込んでいくように知識が入っていく。「お前みたいな興安嶺で捕れた熊みたいな男は吸収する力があっていいんだ」と言われた

●1945(昭和20)年4月 関東軍憲兵司令部科学偵謀班(司令部第4班)に

- ・満州にいて普通の憲兵のやる事は分かっている。科学捜査ではなく見込み捜査。勉強させてくれるならと希望した。
- ・国境対策としての指紋収集、犯罪現場を撮る写真技術、電気、化学分析。
- ・ソ連のスパイは無線機を持って本国へ送っているの、夜中に電波探知機を持ちながら歩き逆探知する。
- ・細菌や毒ガスが使われた現場検証のやり方を学ぶため新京医科大学や大陸科学院にも行った。

●1945(昭和20)年8月9日 ソ連軍が満州に侵攻

- ・侵攻前から治安が悪くなり特別警護隊が作られる。憲兵・特務官・普通の兵隊による弾圧部隊。
- ・8月9日爆撃が始まると、教育は放り出して、すぐに奉天に集まれ。汽車で南下するうちに終戦になった。どんどん避難列車が南下してくる。憲兵司令部、関東軍司令部、軍官僚の家族は先に帰った。
- ・奉天憲兵隊長が警護隊長になると言われたが、その憲兵隊長が自殺した。奉天医科大学に入って住む。

●1945(昭和20)年8月20日頃 奉天北稜で捕虜に

- ・馬車に荷物を積んで一度開拓地に帰ろうとしたが略奪された。街で将校に会い、負けてそんな事が出来る訳ないだろう、開拓地に行ったら無駄だと言われ戻った。
- ・黒河で中国人からソ連に連れて行かれたら10年は帰って来ない、俺の家に逃げて来いと言われた。憲兵隊の中では帰れないとも流れていたが、食うや食わずの国に帰ったって仕方ない、見てやろう聞いてやろうと思った。

●中央アジア・ウズベキスタンに抑留

- ・バラバラで行った人は身分を秘匿できるが、僕らはまとめて行ったから 誰が何を担当しているかとソ連は分かっている、嘘を言ったってしょうがない。

●1950(昭和25)年2月 復員

(取材日 2012年5月4日)